# 巻頭言

## くやしいけれど面白い

ちょうど5年前に，柳田敏雄さんが「面白そうでない研究を面白くするのが本当の研究者」という巻頭言を書いています．さすが我が尊兄，「面白く」は大切だな，と思ったものです．実はこの頃から，私は生物物理が本当に面白いと実感するようになってきました．以前は論文を読むのも学会に行くのも「勉強のため」という義務感が強かったのですが，最近は，「あっ」とか「うーんそうか」とか，感心する機会が増えました．

面白いはともかく面白くのほうには，独りよがりの楽しみでなく，新たな発見・理解の喜びを共に分かち合おうという思いが込められていると思います．私自身はずっと自己満足のために研究のまねごとをしてきたのですが，一緒に面白がってもらえれば，自分の楽しさもはるかに大きいだろうな，ということが少しわかってきました．研究者というのはそう簡単に人の仕事を面白がったりしないものですから（私だけかな？），分野の離れた研究者の目も輝かせることができれば，本望でしょう．

が，悟るのが遅かったようです．喜びを共に分かち合うには，自分自身が研究に参加していることが大前提ですが，それが崩れてしまいました．身近に若い研究者の卵が大勢いますが，私が自分でやったらさっちょこだちしてもできそうもない面白い結果を次々と出してくれます．私の居場所がなくなってしまったのです．この口惜しさ，わかってくださる方は少ないでしょうね？「他人にやってもらう楽しさ」というのも尊兄に教わったのですが，自分も楽しませて上げられないのでは，評論家にすぎません．せめてこのくやしさをバネに，もうひとあがき… 程度ではとても面白くはできませんね．

身近なくやしさは自分自身に対する腹立ち．いっぽう遠くの仕事へのくやしさは，純粋な賛辞です．今月号は，どのくらいくやしい思いをさせてくれるでしょう．

慶應義塾大学理工学部　木下一彦